保するためには、昨年、豊後高田市という九州の市に行かせていただいたのですが、そこはすばらしい子育て支援策や女性が働きやすい仕組み作りがすごくされていて、すばらしいなと思ったのですが、そういうふうにやはり行政単位で無理のない仕組み作りをしていくことはすごく重要だと思います。

あとは起業ということで、起業支援というのもよくありますが、起業支援だけではなくて、起業はある程度簡単にできますが継続していくことが難しいのです。ですので老い先長い中の学びの機会やコンサルティング、メンター、キャリア相談などを整えたり、ふれられる機会を作るということが大事なのではないかと思います。

2つ目は、人間関係のトラブルです。若い方の中でも、地域にうまく溶け込んでいる人とそうでない人がいます。メディアではよく、田舎イコール暖かくて親切な夢の場所というもち上げ方をする場合と、もしくは田舎イコール闇のるつぼみたいな、極端な例に切り取られることもあると思います。

それは、若い方々の認識のギャップを生んでいるのではないかと思います。事実としては都会でも田舎でも、いい人も悪い人もいるし、いいところも悪いところもあるというのが事実です。なので過剰なアピールや売り込みはしないほうが適切かと思います。

ギャップがあるのに期待して来て、「違った」みたいになった時に手のひら返されたみたいな気分に若い人がなって、地域から離れたあとに地域の悪口をたくさん言うという例もあります。

そのへんのことを共有していくことは大事なのではないかと思います。あと、田舎の文化や性質で、お金では回っていないところ、相互扶助関係というのがありますが、これは昔から、ものをもらったら返すとか、親切はお互いさまという関係が普通、それがあたりまえということがあると思いますが、今の若者、20代とかだと自己主張はしてもらえるものはもらうけど返さないという価値観の人もたくさんいます。

それは本当に価値観の差だと思うんです。その違いをお互いに知っているかどうかがすごく大事だと思います。そういう差が出た時に、地元の方が好意でしたことなのに踏みにじるようなことをしてトラブルになるというケースが起こっています。

フリーライドをする人間が得する感覚になってしまうと、地元の方の受け入れる気持ちもなくなったり反発に変わったり、一生懸命地域のことをしようと思って必死になっている人も多いと思います。

人口が少なくなっているのでひとりの人に過剰に5つ6つの役がかかっていたりして、そういう方々はそれなのに何ごともないみたいになってしまっている場合もあるので、そのへんの仕組みを作るとか、集落の仕組みの方針、役周りの方針、そういうことも必要なのではないかと思います。あとは価値観の違いの共有です。

3つ目はそういう地域と移住者のあいだに挟まれている、移住窓口もしている移住支援者の負担が大きくなってきているということがあります。
移住は、入れてしまったら終わりというものではなくて、商品とは全然違って、結婚みたいなもので、それをしてからが始まりなのですが、たとえば予算にしろ労力にしろ、入れるところに集中しているけど、本当は入ってからの生活のフォローアップや相談やトラブル、そういうことに対して労力や予算を使っていくということが実はすごく大事だと思います。

ですが、そこが、数値的なものが出ないので評価されないということになっていて、本末転倒になっているのではないかと思います。そろそろ移住支援の方だけというより、行政と法律と社協、雇用、精神福祉、教育という多層的な支援の仕組みが必要な段階に来ていると思います。

そういう地域を思って担ってくれている若者、一生懸命やってくれている若者、そういう方々をつぶさずに大切にサポートしていくことが何より大切だと思います。

最後に、もともと移住は人口を増やすために、急激な数ということに焦点があたりがちだと思いますが、さっきの講演でもあったように1%でいいというのであれば、徐々に微増というのが私はいいのではないかと思います。

それよりも質ですね。質が伴っているのかということが結局目に見えない部分で、長いスパンで見た時に重要になってくると思います。移住のゴールは移住してもらうこと自体ではなくて、その先に未来が見えること。暮らしていくこと。いかに移住者も地元の人も支援者もよい人生を地方で作っていくことができるかということ。その観点がこれから移住者だけでなく若者や老人も住みやすいまちをつくることにつながるのではないかと、この12年間、移住のことを見て来て思います。以上です。

指出／はい、ありがとうございます。もう何だかこれでまとまりましたね。ありがとうございました。ニコニコした笑顔ばかり載せている雑誌で、戒めとしてちょっとぐさりと来ましたね。気をつけます。では榊田さん、お願いします。

榊田／皆さんこんにちは。私は農業関係の記者を30年近くやっている人間で、それで農山村を見続けてきました。

今は大学で授業をしたりしているので週に1、2回しか出張に行けないのですが、30代40代は週の半分くらいは農山村を回るという暮らしをしていました。

今日いらっしゃっている皆さんの中には、自治体の方でも農林部署というよりも地方創生で総務や企画の方が多いと思いますが、せっかく農業関係の立場で来たので、そちらの視点から見た話をさせていただきたいと思います。

農水省によると、2017年、新規就農者、過去最高の数字でした。田園回帰の流れが若年層に続いている現れというコメントも出しているのですが、私はけっこう取りこぼしがあるのではないかと思って見ています。

というのは、今日いらしている松嶋さん、ヒビノさん、ふたりとも農家ではないんですよね。農家ではないけど農家とのつながりをいろいろ持っていらっしゃる方です。そういう方や専業ではない農業者の方、先ほど藤道萩市長さんが55歳以下、兼業というところまで幅を広げた市の単独事業をやっていらっしゃるとおっしゃいましたが、国の事業自体は45歳未満で専業というのが前提で支援を束ねています。

評判はよかったのは青年就農給付金制度ですね。今、農業次世代人材投資資金ですか、名前は難しくなりましたが、仕組みは同じです。そうするとやはり45歳以上で兼業、あるいは兼業だけではな

く、農家とつながって農産加工をするとか、飲食をやるとか、そういう方たちというのが入ってこれない。そこをもうちょっと考えたい。

地域農政は今、国の農政が農業の成長産業化を目指して、自立経営体を育てるということになっていて、当然それが上から下りてくるわけですが、地域の農政を考えた時には地方に若者を呼び込むという視点の中に地域農政を組み込んで行くべきなのではないか、地域を基盤に立脚して考えていくべきなのではないかと思います。

真っ先にそれをやられたのが島根県で、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、半農半X支援事業、国の事業とはまた別に45歳以上で、半分は農業、半分はX、ほかの仕事という兼業前提での受け入れの支援というのを始められましたし、今年11月に長野県がふるさと回帰支援センターでIターンUターンの説明会をやるのを見たら、ひとり多役という感じですね。ひとりで多くの役、多業型の暮らしといわれていますが、ひとりでいろいろな役をする暮らしをうちでしてみませんかという呼びかけを長野県はしていて、農業政策というより、ほかの産業政策とリンクした呼び込みの仕方が必要ではないか、移住政策は移住政策、農業政策は農業政策というふうに分けていると見えて来ない、落ちてしまうものがあるのではないかと危惧しています。

それで2つ目ですが、今の話とも関わりますが、非農家の方、農業だけではない方たちが移住して果たしている役割はすごく大きいと、地元を回っていると感じます。

特に、松嶋さんみたいな方もいらっしゃいますが、私が回っていて印象に残っているのは女性の方たちが多くて、女の人は結婚したらいなくなっちゃうからだめだみたいな言い方をするアタマの硬いおじさんもいますが、実は、女性は結婚して出ていっても地元とのつながりを持ち続けるとか、つなげる力をすごく持っていると思います。ですから侮れない。

彼女たちの後ろには、たとえば都市からIターンしてきた彼女が人脈を持っている都市住民がいっぱいいて、情報発信をしてくれている方。それから婚活ですごく頑張っていらっしゃる方もいて、実際に地元の農業者の方たちが何組も彼女が開いたイベントで結婚しているとか、そういうこともあるので、業種を絞り込まない、縦割りにしないで、視野を広げた有機的な、先ほど藤山先生が連結決算とおっしゃいましたが、そういう有機的なつながりの中で移住者の存在を考えてもいいのではないかというのがひとつ。

もうひとつ思っているのが、関係人口の話が今日もたくさん出ていますが、交流と定住の間に、関係人口というのがあるというのはすでに定着してきたと思いますが、定住の中でもさらに、一ヶ所にずっといるのではなくて、ヒビノさんのように東京に行ったり大阪に行ったりいろいろなところに飛び回って時々は自宅に帰ります、みたいな、二地域居住と言われますが、多地域居住、そういう人たちもだんだん出てきているので、そういう人たちも地域にとっては人材になるのではないかと。

交流、関係、定住と、型にはめるだけではなくて幅広くいろいろな人たちを考えたらいいのではないか。

それから、ヒビノさんもおっしゃいましたが、起業してからの話ですが、ずっと寄り添うことが大事というのは本当に思っていて、新規就農で入った人も、入ったはいいけどそのあと1年2年の研修くらいで農業でプロになれるわけではなくて、研修終了後も、しばらくはついていてもらわなければいけない。

相談できる人もずっと必要で、技術の相談はできなくてもこまめに顔を出してくれる自治体職員がいたおかげでどれだけ気持ちが救われたかみたいな話をしてくれる人もいて、そういうコンシェルジュ、上士幌のコンシェルジュさんも今回受賞なさいましたが、そういう存在が本当に大事になっているなと思って見ています。ということでマイクを指出さんにお返しします。

指出／はい、ありがとうございます。4名の皆さんはそれぞれの視点から取組をお話してくださいました。

藤道市長さんは、山口県と萩市の現状とこれからの人口に関しての変動、取組のプランのお話、大きな形で人口減少に対してどう立ち向かう、というより寄り添っていくかということをお話されたのだと思います。

それから松嶋さんは、地域のつながりというものを交流人口の拡大につなげる上でご自身の仕事だけではなく、生態系の現れのような形の取組をお話してくださいました。お寺の役割がものすごく大きいということを僕も学ばせてもらいました。

それからヒビノさんは、実際に活動されている中で見聞きされたこと、ご自身で体験されたことをまさに今日の会場の、私を含めて、皆さんと一緒に、移住者や若い人の受け入れをする上で確実に課題になっていったり、これをクリアすることでさらに展望が開けることをアドバイスとしてまとめてきてくださいました。ありがとうございました。

榊田さんは、農業の視点で、農業というものが縦割りなものではなく、それから農業だけではない周辺のものも農業として考える時代が必要だと、まさに農業関係人口の話をしていただいて、お話として非常にわかりやすかったです。僕も今JA全中さんから依頼を受けて、農業関係人口を増やす取組の監修をやったりしているので、農業という魅力的なものを若い人にどう届けるのかというのを皆さんと一緒に共同でやっていけたらと感じています。

それでは話をフリーセッションとしていきたいと思います。今、皆さんの発表を聞かれて、それぞれ、この人のこの話がおもしろかったということをお話いただけますか？　ではまず藤道市長、いいですか？

藤道／松嶋さんのお話ですね。あくまで、身近にこういった方がいるからという観点で、周防大島に来られてすでに何十人も従業員を抱えてジャムズガーデンをここまで大きくされているということ、それからスライドでもありましたが、春夏秋冬、その季節の野菜果物を活用されてジャムに集約されるといったことをしっかりと短期間でここまで地元に根付いたものにするといったことが、過疎の進んだ周防大島でできたんだということが驚きでした。

環境に恵まれないからこそ、こうしたひとりのリーダーがやってきて、その上で周辺の住民を巻き込んで、あるいは新しく来られた方を巻き込んで、ここまで事業を展開されるというサクセスストーリーを、ただ、ひとり、こうした方がその町にいることによって、「私も」「俺も」という方が続いてくるような気がします。

人間はうまくいった成功事例を見ていかないと、何をやっても自分はうまくいかない、この地域はだめなんだ、こういった思い込みを払しょくして「ここでもできるんだ」という気持ちを奮い立たせる、そんなことができるような、してもらえるような、そんなひとつの成功事例を生んだということは、松嶋さんのような成功事例を萩でも生んでいきたい。それによってまちの活性化を進めていきたいという気持ちになったということで、非常にいい話だったと思っております。

指出／ありがとうございます。全国的に見ても松嶋さんのやっていることは断トツだと思いますね。言い過ぎですか?

松嶋／言い過ぎですが頑張ります。

指出／東京にいながら副業として手伝いに来るとか、スタッフとして来てくださるとかという人の気持ちは、まさに今の若い人たちが地域に惹かれる理由のひとつなのではないかと思いますが、その辺もあとで解を導き出そうかと思います。お願いします。では、松嶋さんはどうでした?

松嶋／私は、農業は縦割りではなく、周辺のものも含めて農業ととらえる時代というご提言が、非常に「あ、そうだな」と思って、特に過疎のエリアというのは「私は農業だけしていればいい」とか「私は漁業だけ」とか「私は先生だけ」とか「私は観光業者だからそこは関係ない」とかではなくて、みんながつながれば、また新しい価値がすごく生まれてくるというのはたぶん田舎のおもしろいところだし、実は簡単につながるというのはあるのだけど、このつながりで何かしようよというコトさえ起こせば火がボッと燃え上がるのではないかと思っています。

本当に、これは農業だけではなくていろいろな業界が結局縦割り式になってしまっていて、特に予算とか、縦割りで農業系以外のことはなかなかやりにくかったり、うちみたいに何かほかのものを作ったりとか、販売とか漁業者を手伝うとか、「何をやってるんだ、おまえは」という話になってしまうので、そういうところも行政からの補助なども難しいんだろうなと思うのですが、本来、田舎ってそうで、一人多役って、まさしくそうだと思いますし、そこはすごくそうだなと思いました。

指出／ありがとうございます。ではヒビノさん、どうですか?

ヒビノ／松嶋さんのお話を伺っていて、私の父の故郷が周防大島なのですが、よく行っていた小さい時の思い出がいっぱいあるあの島がこんなふうになっているとはといった感じで感動しました。

何と言うのでしょう、本当に感動するなと思って。もともとすごくいいところで大好きだったし、そういう原風景があったから、もしかしたら自分も田舎で暮らしたいと思ったのかもしれないなと思うのですが、そういう島にこういう方が来てくださって、そういうことをされているということ自体が本当にありがたいことですし、素直にそういうふうに感動してしまいました。

指出／はい、ありがとうございます。では榊田さん。

榊田／先ほど発言の中でも言わせていただいたのですが、藤道さんのお話で55歳までというところにある程度幅を広げた受け入れをやっていくということと、あとふたつ、松嶋さんの場合はどうすればこういう事業を拡大できたのか。松嶋さんみたいな人は全国にこれだけの人はいないと言ってしまうと、この人は特別だからという話になってしまって展開できなくなるのですが、実際にIターンで入られてこうした6次化を進められたというのは、小さいパン屋さんとか、私が知っている範囲では、近くの養豚法人さん、歯医者さんに勤めながら自分で小さい農業をやるとか、家庭教師をやりながらとか、わりと、生業はなんとか立てているのだけど雇用ができるほどの事業を立ち上げている方はなかなかいなくて、30人も雇用するような会社にでき

る、どうすればそういう人材が出てくるんだろうということをすごく考えさせられたというのがひとつ。

もうひとつはヒビノさんのお話で、1%でいいのだからそんなに急いで呼ばなくていい、質の問題であるとおっしゃった。有り体に言えば、「誰でもいいから」とは呼ぶなとはっきりおっしゃったようで、そこがすごく印象に残って、ではどういう人はやめたほうがいい、どういう人がいいと思っているのかもちょっと気になりました。

指出／ありがとうございます。それは僕が受けて、皆さんに質問ですが、そもそも「田園回帰、～地方に若者を呼び込む」というこの若者は、皆さんは誰を意識して若者だと思って今日集まってくださっているのですか？　年齢で区切っていますか？それとも男女の性別ですか？若い人ってどれくらいの幅があるのですか？あまりにも漠としているので見えないですよね。

本当に欲しい人材をつかまえに行って、バックキャストで社会を作るのが時流になりました。

だから、本当はどんな人がうちに来たらいいのだろうという行政単位で考えて、この人が来てくれたらいいなというふうに数ではなく、粒で人を見つけないといけない時代になっていて、若い人は自分が粒だと思ってくれるところに、山口県さんや萩市さんや島根県さんや藤山先生が赤く塗られた場所に行っているのではないですかね。

本当は「若者」なんて漠としたものではなくて、この中でペルソナのセッションがあったら、本当はいいのではないかと思いましたね。では登壇している皆さんからすると若者とはどんな若者像なのですか？　ヒビノさんがイメージする若者はどんな若者ですか？

ヒビノ／やっぱり自立的な方がいいと思います。自分の人生を自分でちゃんと責任を持って作ると思っている人ですね。

移住施策が激しくなってきて、取り合いみたいになったり、得点合戦になったりして、フェアとかやってもそういうふうに呼び込んで、うちに来てくださいというふうにする市町村も増えたと思うのですが、それだとやはり依存的になってしまう場合もあると思います。

入ったはいいけど「何かしてくれるんでしょ」というような態度でずっと住まれてもあとで困りますよね。

指出／困りますね。

ヒビノ／だって都会より厳しいじゃないですか。自立して暮らしていくのはすごく難しいことなのに、そういう態度で入ってきたらやっぱり暮らせないと思うので、自分の人生や暮らしと仕事に対して責任を持てる、それくらいの覚悟と計画性なども必要ですし、そういうのはちゃんと自己決定する人ですね。「後押しをしたから入った」とかだと危ないですね。何かあった時に他人のせいにします。

指出／リアルローカルですか？

ヒビノ／リアルです。その矛先が向くのは行政の担当者だったり、移住支援の担当者になるんですよ。その人たちもその場所に住んでいるから、メンタル辛いと思うんですね。ですのでそういうことにならないためにも、自分でちゃんと責任を取るという覚悟がある人、それは必須なのではないかと思います。

指出／はい、ありがとうございます。松嶋さんのところに来る若い人ってどんな人たちですか？　どんな思いを持って来られるのですか？

松嶋／来るといっても、住んでみたいというふうな感じで来る中で、結局住む子たちというのは、うちの島で共通の価値観を持ってくれている人が住んでくれているなという気がします。

家を建ててもらえるからとかそういう移住者施策をしなければいけないと思われると思うのですが、あまりやりすぎるとそれは、それでは元から住んでいる人は何でもらえないのかとか軋轢を生んでしまうわけで、もらったがために地域に溶け込めない、そんなことにもなりかねないので、単純にそういうことはあまりやらなくて、入って来る意識があって「何をやりたい」という意識をきちんと持っているかどうかがいちばん大事なのかなと思います。

具体的でなくても「僕はこういう感じのことをやりたい」というような人だったら、けっこう周りの人も応援するのですが、何となく入ってきて勝手にあそこに住んでるよねというような人は、周りの人も応援しにくい、やはり地域で浮いてしまいますよね。そうだと思います。

指出／ありがとうございます。藤道市長は、発言しづらいところでお願いしてしまいますが。

藤道／発言しづらいですが、お二方のおっしゃることはよくわかります。

若者とは、年齢の問題ではなくて質だとか、「やる気」があるかどうかだということだと思います。この「やる気」とは何かというと、私は萩市ですから松陰先生が言う「志」ですよね。

「志」、あるいは目的といったものがない方がわざわざ知らない土地、あるいはもうかなりの過疎地に戻って来るはずがありませんし、ある程度その「志」、「やる気」のある人こそが戻る、こちらに、田舎に住むのだろうと思います。

行政は、本来であればそうした人たちをサポートする。そして、そうした人たちが地域に根付いていくためにそれをサポートしていくと。その気持ちが続くようにしっかりサポートする立場なのだろうなと思います。

だから都会から人をスカウトするとかいう話ではなくて、来たい人は来てくれと、そのかわりここで、田舎で生活するための環境整備はしてあげるけれども、ただ「何をするか」、それを続けていくために何が必要かは自ら考えてくれと。そういう方ですね。そういう方が必要だと思いますし、それを私は若者と呼んでいるということです。年齢ではないということです。

指出／ありがとうございます。55歳という年齢に関しても、若い方というのをすごくいい形で解釈をしてくださって、気持ちの若い方、それからもっともっとこういうことをやりたいという方を含めておっしゃっているのだと感じました。

やはり「志」のある人は世代を越えてかっこいいので、そういう人が仲間になってのまちづくりや農業はいいですね。

榊田さんはどうですか？　農業に興味を持っている方とかで若い人たちというのはどういった感じの人たちだと見られていますか？

榊田／2種類あると思います。ひとつは成長産業とも言われていますし、農業が儲かると思っている、思って農業に関心を持つ人というのも確かにいると思います。で、野菜も若干単価が持ち直したりもしているので、そういう点で、たとえばこのエリアでピーマンを作る農家募集といったような、品目が決まっている、そういう形で入って来る人もいるし、一方で生き方を求めて入る人。二通りある気がします。

もうひとつ言いたいのは、農業だけではなくて、先ほどちゃんと意欲があって生き方を考えている人という話がありましたが、私もそう思っていたのですが、最初からそう言ってしまうと、けっこうハードル厳しいかなと、優しい私は思ってしまいます。

というのは、緑のふるさと協力隊という、地域おこし協力隊のモデルになった組織があるのですが、その面接の担当をした時に会う若者たち、20代、30くらいまでの子たちって、まだそれほどはっきり「これがやりたい」と決まっていない。

決まっている子は地域おこしのほうに回っていくのですが、実際に現地に入って、ここに地域の課題があるなと気がついてからだんだん地域に居場所を作っていく子もいるので、そういう意味では少し時間をかけてみる、初めから移住でと引きずり込むのではなくて、何回もつながりを作りながらその地域にあう人間なのかどうかを見極めることなのかなという気もします。

指出／ありがとうございます。それは関わりを深めていく、ちゃんと階段を設けるということですよね。

はい。では、皆さんに、まとめの質問になるのですが、若い人を地方に呼び込む、もしくは地域の魅力を発信する形で大都市や都市に住んでいる若者がその地域を見つけてくれるためにはどうしたらいいのですかね？

まだ、たぶん知らない人たちもたくさんいて、でもあやふやに地方っていいなとか、ローカルっていいなという人は、どんどん東京では増えているんですね。

たくさんのまちの中で、人気のあるまちができあがっていますが、ほかにも潜在的にそういうところを若者が見つけてくれれば、いい形でコミュニティが育っていく場所はたくさんあると僕は思っていますので、ぜひ4名の皆さんにどうやって若い人たちが地域を魅力的に感じてくれるようにできるのか、ちょっと教えてください。

これは逆からいってもいいですか。榊田さんからいきましょうか。

榊田／難しいですね。発信というか、つなぐ、マッチングしてくれる情報ツールがあってほしい。

あそこに行けば、こういうことができるとか、あそこはこういうまちでとか、行きたいと思うところにはこういう課題があるといったような具体的な情報を出してくれるような、そういうのがあるといいなと思うのですが、最近はリクルートとかマイナビとか、就職情報誌業界も農業での就職というのに目を向けていますが、そこで単に農業法人に就職しませんかというのではなくて、たとえば東京にいながら販売を手伝いますとか、ネットでホームページを作ってあげますとか、距離は離れていても、まずはそんなに負担にならずに地方のお手伝いができるような仕事を紹介してもらって、そこからつきあっていける関係になれるといいなと思います。

指出／ありがとうございます。ではヒビノさん、どうですかね？

ヒビノ／独自のイベントをするというのがひとつ。移住フェアとかはいっぱいあるのですが、その中だと競争みたいになったりもすることもあると聞くので、その団体、行政ごとの独自の、昔うちでやっていたのは、たとえばカフェイベントみたいな感じでいろいろおもしろいのをやってみるとかもひとつ。

集客としては、独自の人たちが来ていたので、い

つもフェアに来ない人たちがわざわざ来ていたということもあったので、そのへんはいいのかなというのと、ネットは若い人は見ているので、ネットの使い方ですかね。ブログやSNSとかの使い方を上手にする。これも打ち出し方がすごく大事だと思いますが。

指出／わかりました。嶺北の実例からそういうことがおっしゃられていると思うので。最初のころはイベントでしたか？

ヒビノ／そうですね、イベントですね。

イベントとか、本当に私たちの周りの人たちのSNSとかで発信してみんなに知ってもらって東京とかから来てくれるという人たちもいっぱいいました。

講演をした時によさそうな人を捕まえてくるという。そういう個人的な作戦をみんなでしたりしていました。

指出／勉強になります。ありがとうございます。では松嶋さん、どうですか？

松嶋／そうですね。自分が入る時に、いきなりいろいろな地区の人とつながるというのは、あいだに立ってくれる人がいる地域かどうかというのは非常に重要視されると思います。

僕も最初に移住した時、いろいろな農家さんに声をかけてもそっけない態度をされたことがあるのですが、たまたま妻のお父さんが住職で、あいつなら知っているからと声をかけてくれたら、翌日には果物が届いているみたいな、実は田舎ってそうだったりします。

あいだに立ってくれる人が信頼できる人がいるかどうかというのが必要だと思って、島くらすというのを立ち上げて、結局、地域とつないでくれつつ欲を言えば自立してくれるようなそういう仕組みづくりというのが必要だと思うので、そういう仕組みがあるんだよというのを見せるというのは必要だと思います。

移住者は、そういう経験をするとまた新しい移住者に口コミとか、情報発信は今は誰でもできる時代なので、そうやって新しい移住者のマーケットでヒットしやすくなっていくというところにつながっていくと思うので、まずは地道ながら足元のそういう改善とそこを見せていくというのがひとつ。

もうひとつは結局、移住する時に、だいたい都市部の人はサラリーマンなので、経営者でバリバリやっている人が、いきなり地方に行って経営するかということはないので、そうすると移住した先で、自分が何をするかといったら個人事業主とか、農業もまさしく個人事業主ですね、そうすると経営者にならないといけないというのは実は非常にハードルが高かったりします。

そこをもう少し地元の企業を育てて、そこに移住者に行ってもらえるような仕組み作りをしていくとか、要は移住のオプションをいろいろ作ってあげないと、今は移住できるだけの度胸、独立、起業する度胸のある人でないと来れない、そこが非常に大きなネックになっているのかなと思います。

あとは、関係人口という意味で言うと、うちの会社も、東京に住みながら、うちのジャム屋を、週末になったら手伝ってくれたりとか、年に何回かうちのジャム屋に来て、社宅に泊まって一緒にバーベキューをして、みたいな、そんな人たちもいます。そういう人たちも、すごく田舎につながりたいという意識を非常に持っていて、そういう意識の人たちとどうつながっていくか。

その選択肢が、絶対移住ではなくても、うちの会社にとっては、東京で関わってくれる人がいるのはすごくありがたいことだし、そういう人たちともオプション、どういう選択肢がとれるかというのももっと提供していくことも必要なのかなと思います。

指出／はい、ありがとうございます。では藤道市長、お願いします。

藤道／はい。これはやはりいちど来てもらうということにつきるのではないかと思います。

萩の場合はおかげさまで、観光地として有名です。名前を聞いたことがあるという方が多いです。ただ、それを観光で来てもらうにしても遠いとか時間がかかるとかきっかけがないとか、そういうことで、名前は知っているけど来たことがないという方がけっこう多いんです。そうした方が、いちど萩市に来てもらうと、いろいろアンケートを取りますが、こんなによかったのかと。こんなにきれいなまちなのか、武家屋敷が残っているのか、あるいは人がいい、小学生が元気だねといったことを言ってもらえるのです。

それは観光客が増えるということとつながるのでしょうけど、ひょっとしたらその先に、移住につながることもあるのではないかと思います。
それともうひとつ、もちろんSNSだとかいったもので発信をしていますが、まだまだ足りないということ。

あとは萩を、萩暮らしを体験してもらうということが必要だということで、これは一般の方、成人の方ではなくて、北九州の中学生に呼びかける。中学生で農泊体験、農業体験をしてもらっています。これは北九州のひとつの学校から始まったのですが、かなり広がりまして、農業が体験できる春や秋といった季節を選んでいただいて、農泊を体験していただく方が増えています。そうした方が、たとえば萩の農業だとか生活だとかを体験してもらうことによって、将来ひょっとしたら、都会の仕事に疲れたからと萩にIターンしようかというようなこともあるかもしれません。

ただし、それは農業です。農業だけ、コメづくりだけではなかなか生活できないという現状もありますから、来てもらう時に、先ほど松嶋さんからもありましたが、ここで生計を立てるためのオプションを用意しなければいけないということで、それは農業だけではなくて、萩市は観光のまちですから観光の仕事であるとか、あるいはさらに起業創業といったことを、萩はそういった気風が今は残念ながらありません。

したがって、ここを育てるために、起業のビジネスプランコンテストをやっているところです。今週末にやります。募集して、まだまだビジネスプランは練られたものではありませんが、一般の方については、10件以上集まっています。市民以外の関係人口も、萩市に興味があって萩で事業をしたいという方々も応募していただいています。

あわせて、萩で生まれ育った人間にもビジネスプランを大学あるいは社会人になる前にいちど考えてもらおうという意味で、そのビジネスプランコンテストを高校生、大学生向けにもやっています。

残念ながら、これは応募が0件です。ただ、私は、ここはこんなものだと思っています。つまりビジネスマインドを高校では教えてないということなのです。そうした教育をまず進めていくということを来年度からやろうと思っています。

一つひとつトライアンドエラーで学んでいく、やらなければいけないことを一つひとつ手探りでやりながら、将来的には萩で住みたいという方々に対する仕事を用意するということをやってまいりたいと思います。

そうしたことを地道にやった上でPRすれば、より都会の若者たちだとか、多くに訴求する、そんな効果が出て来るのではないかなというふうに考えているところです。

指出／はい、ありがとうございます。それでは最後に僕がまとめさせていただきます。

4名の皆様、ありがとうございました。とても貴重なご意見をいただきました。

お話を、およそ推略しますけど、まず移住者であったり若い人たちが地域に憧れを持っている時代はどんどん熱量を帯びています。

そういったところで僕たちは地域の皆さんがどんな形で彼らを迎え入れたらいいかといった時に、やはり数ではなく粒であったり、一人ひとりという単位でその人たちのことを迎え入れることが大事だと感じています。

そして、藤山先生がおっしゃったように、1年で結果を出すものではなくて、生態系と同じで、ちゃんと重ねて育て上げていく、30年のスパンのような形で地域を作っていく。

嶺北や周防大島がいい例ですよね。1年で急成長したのではなくて少しずつ積み上げていった結果、若い人たちが憧れを持つ地になっていきました。

そして、これから実際に山口県さんや萩市さんもそうした形で動かれていくのだと思います。
ですので、若者が地域に興味を持っている今だからこそ、僕たちが迎え入れる側として、地域の良さをちゃんと伝えながら、でもあまり一足飛びではないことを、課題も含めて話をすることで関係性が深まっていく、それが実際には田園回帰につながっていくのではないかと感じました。

皆さん、長い時間おつきあいいただいてありがとうございました。

これでパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。あ、松嶋さんから大事なメッセージがあるそうです。

松嶋／事故で大島大橋が損傷しました。今、島の事業者が非常に苦しんでいます。
作ったものも結局売れずに、飲食店とかも、みんな腐らせています。

皆さんにぜひご協力をいただきたいということで、今回取り急ぎだったのでうちのものしかなかったのですが、注文用紙を持ってきました。

今後、うちのホームページで島の物産、いろいろ買えるようにしようと思っていますので、ぜひご協力いただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

指出／ぜひよろしくお願いいたします。
では、長い時間ありがとうございました。皆さん、ありがとうございました。これで終わりにしたいと思います。